

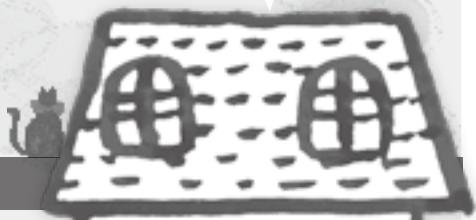
連載●2

認知症の人の終末期を考える

延命治療・胃ろう・終末期とは――



4.5月は

土井正樹 医師
●京都・土井医院院長

前回は、難病により明らかな嚥下障害のある方が、胃ろう造設術を受けられて元気になられた話をしましたが、今回は、同じように食べられないといつても体が栄養を受け付けなくなっている場合の話をします。

自宅で過ごす癌末期の方を多く診ていますが、癌の進行と共に食欲がなくなり、食べものを見るのも嫌で無理をして食べているという方をよくみかけます。これは、腸の動きが悪くなっていたり、あるいは一部が狭くなっていたりすることが原因していることもあります。胃腸が癌に直接侵されていない場合でも、非常によくあります。このような時に、高カロリーの点滴を行っても、体のむくみが強くなり、胸の中やお腹の中に水が溜まって、樂になるどころか逆に苦しさを増すばかりのことが多いのです。点滴をするとしても、少量のみに留めることは、がん緩和ケアでは今では常識になっています。

実は、老衰の場合もこれと同じようなことが言えます。一般的には、年齢とともに少しづつ、食べる量が減っていき、体が小さくなり、食べる力も弱くなり、バランスが取れて、少し回復したりまた悪くなったりしながら、やがて自然な大往生に至ります。癌末期の場合と違うのは、衰弱の早さが違うだけです。食べることがむしろ辛くなってくる時がいつか来ます。これは体が欲していないことの現れです。このような場合に水分・栄養を点滴や胃ろうなどで、無理に体の中に入れても苦痛を増すだけになります。

胃ろうをしている人を見ればそのことがよく分かります。食べられる体力がなくなっても、直接胃の中に、栄養が注入されますから、体の痩せな

どは目立ちません。では注入を続ければどうなるのかと言いますと、最終的には体がむくんできたり、下痢が続くようになったり、胃に入れたものを口からもどしたり、むせて肺炎を起こしたりするようになります。つまり、外から入れた栄養を有効に使えなくなる時がやはり来るのがです。もちろん、その症状を引き起こしている原因があれば、まずはその治療をするのは当然ですが、なければ大往生の時期が来ていると判断し、ご家族の理解を得るようにし、注入量を減らしつつ、少しでもご本人の苦しみの少ないように、介護、看護を続けて見守ります。そうすると、それまで胸でゴロゴロ鳴っていた音が弱くなり、下痢や嘔吐、むくみ等も軽減し、外から見ても大変楽そうになります。つまり、体力の低下と並行して、大往生に適した栄養量は次第にゼロに近づいていくことを表しています。

認知症の人では、食べ物の認識や食べるという意味、食べ方が分からなくなる場合があります。このため、付き添って食事介助をしたりしますが、工夫が必要です。まずは雰囲気作りです。グループホームでは、大家族のように食事作りから皆が参加し、においや食卓の準備など徐々に食欲をそそるようにして、みんなで食卓についてスタッフも一緒に頂くことにより自然に体が食べるというモードになり、食事が進みます。一般的に、食事は汁物からはじめ、介助をする時は、できるだけ座って頂いて、一口ずつゆっくり適量を口に運びます。決して無理をせず、あまり時間がかかるようであれば、本人も疲れるので時間を区切って休むようにします。食事の雰囲気、本人の姿勢、食べ物の工夫（食べやすいもの、飲み込みやすいも

の、好みのもの等)、スプーンなどの自助具、食後の口腔ケアなどいずれも重要です。

当院が認知症対応型のグループホームを開設し、この春で5年になります。すでに6名の方がグループホーム内で亡くなられております。認知症の方を長期に見ておりますと、半分近くの人が食事介助をして食べられています。私もグループホームで昼食を摂り、食事の様子を見ていますが、観察しているとその中で、食事量が減っていく人が出てくるのが分かります。食べることを嫌がっておられる時は、歯の状態が問題であったり、便秘や内科的な異常が原因であったりすることが多いのですが、何も原因がないこともあります。このような場合、胃ろうや点滴の話をご家族にしますが、これまで胃ろうを希望された方はありません。認知症においては、他の病気のない限り、体力の低下と嚥下力の低下は、ほぼ同程度に起き、嚥下力が突出して落ちるわけではありませんので、胃ろうは必要なしと私は考えます。

食べる力は生きる力とよく言われます。口から食べられなくなった時、体力が十分あるのに嚥下障害が原因であれば、空腹という苦しみが生まれます。この場合は何らかの形の栄養補給を考えるべきです。しかし、老衰により食欲自体がない場合は、これは大往生として受け止め、無理な補給は避けた方がよいと思います。明らかな嚥下障害がある場合は、原則、口から食べるのを止めて胃ろうにするべきかもしれません、その危険性を承知で口から食べ続けるのも自由であると言えます。そこが意見の分かれるところで、選択はケースバイケースということになります。命の終焉は必ず来ます。十分な情報をかかりつけ医と共有し、最終的には「その人にとってその人らしい人生を生きる…」そのことを支えるというふうに考えれば良いのです。

（つづく）

▶次回からは会田薫子氏です。



「胃ろう」への家族の思い②

支部会報から探る

「胃ろう」を導入した家族の思い

●胃ろうの迷い（大阪府支部）

「胃ろうはしない」これは胃ろうを導入するまでの私の思いでした。

しかし、毎日介護に携わっているとその判断も常に揺らいできました。介護生活も長くなると病状に合わせて介護の仕方もその時々で、最適な仕方に変えていかねばなりません。胃ろうについての賛否両論の学説、家族の経験談、造設後の経口摂取、看取りを終えた人の意見も参考にして「胃ろう実施」へ踏み切りました。

しつこい褥瘡等の余病の改善、時間はかかりますが計画的に介護ができる、嚥下障害が改善され、胃ろうを導入したことで反省はなく良かったと思っています。

●胃ろうが機能せず持続に戻れない（福岡県支部）

前頭側頭型認知症と診断され、5年経過した要介護5の母は昨年特養に入所しました。暮れ頃から嘔吐を繰り返し検査入院。口から食べられなくなり、このままでは餓死すると医師に言われ、家族はみな反対しましたが1月に胃ろうの手術をしました。しかし、下痢が始まり胃ろうが機能せず、肺炎を繰り返しました。何のために胃ろうをしたのか悔しい。寝たきりになっている母の様子を見ると、可哀想で精神的に不安定な毎日です。

胃ろうを導入しなかった家族の思い

●エンディングノートで判断（兵庫県支部）

58歳で発症し、17年間介護してきた妻は最後には嚥下ができなくなり、胃ろうにするか判断を迫られましたが、以前、妻との話の中で「胃ろうは嫌だ」という話を書き留めていたので胃ろうは止めることにしました。

●胃ろうはしないけど、なにもしないのは辛いので点滴を…（京都府支部）

徐々に衰弱は進み、浮腫が強くなり点滴ができなくなりました。その間、毎日、家族や孫、親戚が会いにいき思い出を看護師さんにも聞いてもらいました。親とのこれまでを振り返り、頑張って生きてきた親であったことを心に刻み生きる力になって良かったです。

胃ろう導入を迷っている家族の思い

●「生きていてほしい」との葛藤—胃ろうは治療か、延命か—（京都府支部）

「口から食べられるだけでいいです。むせたら中止してください。医療確認書に書いた通り『胃ろうしません』、点滴もしなくていいです。でも、私たちは父には生きてほしいと思っています。矛盾しますがその気持ちがあることは知ってほしいです。後は先生にお任せします」嘱託医へのお願いでした。

医療職の私はさまざまな嚥下困難な人と家族を見、助言もしてきました。

しかし、最愛の家族の命を決める自分の番になると迷いました。「父がそこにいて会えることが私たちの生きる力になっている、だから生きてほしい」と、いつも「胃ろうはしません」の言葉を発した時に心の中で叫んでいました。

会員さん からの お便り

学びの場にしたいです

鹿児島県・Hさん 43歳 女

「家族の会」会報の存在を知り、思いきつて入会しました。

身の回りのものを「あれ」「それ」としか言えず、文字の読み書きも困難。お金の支払いもできなくなったり、義父をどう支え、どんなかかわり方をしたら安心したり、楽しく生活したり、病の悪化を少しでもゆるやかにできるのか。そばで面倒をみている義母にもどう声をかけたらいいのか悩んでいます。その思いに、この会の存在は朗報でした。少しづつ学びたいと思います。

自分が許せない

愛知県・Kさん 59歳 男

家事等が全くできなくなり、自分の身の回りのことも補助が必要となった家内のため、昨年3月に早期退職をして家事と介護にあたっている。家族は他に92歳の父と87歳の母（要介護1）と長女（32歳）がいる。

家内の病気のことは理解しているつもりなのだが、こちらの言うことを聞かない時に手が出てしまうこともある。元気な時ならば喧嘩になっていたらどうが、今は「痛いなあ」と言うだけ…。一層惨めな気持ちになってしまふ。これから先もっとひどくなっていくことに、先が見えず不安な日々

を過ごしている。薬も治療法もなく、確実に悪化していく妻を見ているのがつらい。

せっかく介護のために仕事を辞めたのに、週3回のデイサービスで家内がいない時、ほっとしてしまう自分が許せない。

優しくできない

大分県・Iさん 49歳 女

脳のCT、MRIでは明らかな認知症は認められないものの、物盗られ妄想、思い込み、同じことを何度もたずねるの症状がある。

しかし、急に始まったわけではなく、昔からそんな症状の性格の持ち主であった。そんな父と同居を始めたが、気持ちは拒絶している。優しくできない。

被害妄想に困っています

高知県・Iさん 70歳 男

レビー小体型の妻を介護しています。自立支援医療（精神通院）の認定を受け、低額でデイケアを利用しています。認知機能の低下もありますが、被害妄想がひどく、私のみならず、隣人、知人を悩ませ迷惑をかけています。

妄想は次々変わりますが、現在は私の亡母（姑）をいびり、いじめたので、自分を恨んでいるはずと、「首を絞めんとて」包丁で「刺し殺さんとて」と言い続けて、このことをたくさん隣人、知人にも言い回っています。

私に金品を取られると、預金通帳、印鑑を知人に預かってくれと頼んだりもします。などなど…。私も老人、体調も悪く、二人暮らしで犬もあり、日々不安続きです。

認知症に詳しくなりたい

熊本県・Kさん 46歳 女

実父は80歳で、中程度のアルツハイマー型認知症と診断されています。要介護1で、現在有料老人ホームに入居しています。

実母は76歳、要介護2、前頭側頭葉型認知症です。両親を一人で介護する辛さを軽減して下さったのが「家族の会」熊本支部の方々でした。一度つどに参加して入会を決めました。

両親、自分のためにも認知症について詳しくなりたいと日々思っています。病院は認知症に対して、まだまだ他人事の段階です。何度も痛感させられました。

若葉マークの介護者です

静岡県・Kさん 61歳 女

アルツハイマー型認知症の夫を介護しています。

情報、仲間がほしいと思ったので、「家族の会」に入会しようと思いました。夫は地区の世話役の取りまとめをしていました。任期があと2年あるところで発症がわかりました。若葉マークの介護者として地区会長としての残任期間の過ごし方に苦慮しています。

できる限り好きなように

神奈川県・Kさん 61歳 男

91歳の母は昨年の父の他界後、認知症の症状が進行しており、長男である私への依存度が高まっています。妻は早く施設に入れてほしいと言っていますが、まだ、洗濯、掃除、調理に頑張っています。できる限り好きなように生きさせたいと考えております。施設に入れることにより症状の悪化が不安です。

何でも拾って帰る夫

京都府・Iさん 66歳 女

平成20年10月に夫はアルツハイマー型認知症と診断されました。テレビを見る等に興味がなく、じっとしていることができなくて、日に10回以上外出します（徒歩やバス）。

そのつど、道に落ちていたり、捨ててあったもの、忘れ物等の衣類、食べ物、他何でも拾って帰ります。警察にも何度か通報されお世話になっています。本人はどこで拾ったか覚えていません。また、捨ててあるタバコもポケットに入れて帰るので、火がついていたらと心配になります。

地域に働きかけて いきたい

長野県・Sさん 50歳 女

支部の講座を受けて入会を決めました。3年間、アルツハイマー型認知症の母を在宅介護し、今年1月やっと特養へ入所が決まり、もう認知症のことは忘れようと思いました。

講座が始まって数分で、介護中のことが思い出され涙が止まりませんでした。家族として慰めあうだけでなく、地域や行政に働きかけていこうというお話にとても感動しました。

今年は笑顔に

山形県・Iさん 女

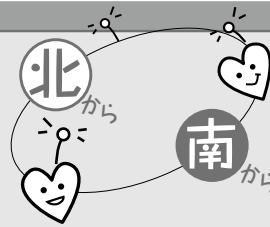
昨年は震災、義母の介護、主人の重なる入院、手術等、いつもと違う1年でしたが、今年は世の中も家庭内も穏やかに笑顔の多い年になればと思っています。

108 支部だよりにみる 介護体験

今回は
広島県

「つながりたい」

広島県支部 斎本茉耶



広島県支部版
(2012年3月号)



●不安と心配

父が認知症と診断された時、私はショックで「この先、私の家はどうなるのだろう…」と不安になりました。まず、経済面での心配がありました。私は大学を続けられるのか、中学生の弟のことも考えると、辞めて働くかなければならないのか迷いました。とにかく学校にかかる費用は自分で何とかしようと思い、奨学金制度の申請と、大学の授業料減免制度の利用申請を行いました。

その他にも父が認知症と診断されて以降、心配事の連続でした。父は仕事に行けなくなり、うつのような症状が出ていたのです。そんなある日のこと、久しぶりに父からメールが届きました。

「父さんみたいにならないでね。」と書かれていました。私は涙が出ました。

認知症のために仕事がうまくできなくなっていたこと、失敗するたびに周りから怒られていたこと、会社を辞めざるを得ない状況で、それでも新しい仕事を探していくことなど…、どんなにつらかったことだろう…。

私は「父さんみたいに、倒されても倒されても頑張って起き上がる強い根のような人生、尊敬するよ。」と、父にメールを贈りました。

●同じ立場の人と話し合える場を

私が一番悩んだことは遺伝に対してでした。おじやおばも父と同じ時期に認知症に

なっており、遺伝によって自分も認知症になるのではないかと心配しました。知識として遺伝によって認知症になる確率は低いと知ってはいましたが、不安は消えませんでした。

また、父への対応もうまくいかず、どのように接してよいかわからないまま進行する認知症にショックを受けました。

学校で親しい友達に相談したこともありましたが、同じ年代の友達にはわからもらえない気がして孤独感を感じたこともありました。同じ立場の人（自分と同じ年代で、親が認知症である人たち）と悩みや思いを語ることのできる場がほしいです。

●「家族の会」

父が認知症になって大変なこともあります、私たち家族を支えてくれる周りの人たちのありがたさ、家族の大切さを感じます。また、「家族の会」に入会して、たくさんの人と出会うことができました。

●父への想い

父がテレビの取材を受けた時、普段知らなかった思いを知りました。それは認知症になっても、私たち子どものために父親としての役割を果たしたいという思いです。

誰もがなりたくないと思う認知症という病気を、たまたまもってしまったのと思うと、父が穏やかに暮らせるように家族で支えていきたいと思います。

いきいき 「家族の会」 まちでも村でも

つどいの年間計画

鳥取県
支部

鳥取県のつどいは、2005年までは3市1町（家族の会30年史参照）でしたが、今年度は支部主催で西部・中部・東部で開かれているほか、行政・地域包括支援センター・関連団体と連携したつどいが県内の18カ所で毎月（一部の地区は隔月等）行われます。また、「若年認知症の人と家族のつどい」は、毎月第

4日曜日に米子市で開催しています。参加者からは「毎月、仲間に会える」と喜ばれています。

2012年 3月号 つどいの年間計画表

実施の会場(名)	場所	日程	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	備考
西伯地の里(大山町)	米子市おれいの里	10:00～12:00	10	8	12	10	14	11	9	13	11	8	12	12	第1回開催日 第2回開催日
福寿井県民活動センター		10:00～12:00	9	14	11	9	13	10	8	12	10	14	11	11	第3回開催日
農耕の里(鳥取市)	農業管理センターでやま	10:00～12:00	20	18	15	20	17	21	19	16	21	18	15	15	第4回開催日
佐喜保保健福祉センター	鳥取中央公民館	13:30～15:00	26	28	23	25	21	27	22	24	26	28	26	26	第5回開催日 第6回開催日
大山町の里(大山町)	大山町公民館	19:00～21:00	4	2	6	4	1	5	3	7	5	8	6	4	第7回開催日
大山町の里(大山町)	大山町公民館	10:00～12:00	16	21	18	8	20	10	15	19	17	21	18	18	第8回開催日
大山町の里(大山町)	大山町公民館	14:00～15:30	23	28	25	23	27	24	22	26	17	28	25	25	第9回開催日
佐喜保保健福祉センター	佐喜保保健福祉センター	12:30～14:00	26	28	23	25	21	27	22	24	26	28	26	26	第10回開催日 第11回開催日
江府町の里(江府町)	江府町公民館	10:00～12:00	12	10	14	12	9	6	11	8	13	10	7	14	第12回開催日
佐喜保保健福祉センター	佐喜保保健福祉センター	14:00～16:00	26	24	26	23	27	25	23	26	28	26	26	26	第13回開催日

●毎月の開催日時、会場等の年間計画表の一部

349号を迎えた支部だより

京都府
支部

介護体験記、つどいの報告等を中心とした支部だより発行の歴史は30年近くになり、その間、悩み、苦しむご本人と家族の支えになってきました。

3月号の「みんなで話そう！」欄のテーマは、「(介

護保険)新制度へのご意見は？」で、現役介護者と専門職からの投稿が載っており、24時間巡回サービスの問題点を具体的な事例から指摘し、専門職以外の会員にも大変分かりやすく、また説得力があります。難しい介護保険の問題を分かりやすい記事にできるのも、30年の歴史の積み重ねがあってのことでしょう。

「若年期認知症のつどい」の課題

佐賀県
支部

支部では、「若年期認知症家族のつどい」を年3回、開催し、日頃の介護状況や悩み、サポート体制を話し合っています。

2月4日に広島で開催された本部主催の「本人(若年)

のつどいを考え広める研修会」に参加した世話人の山口敏伸さんは、「本人や家族にまず『つどい』に参加して頂くこと」「不安や悩みに適切な情報提供や家族支援の場であること」「地域住民や関係機関の理解とサポートを求めることが、今後、支部が取り組むべき課題であることが確認できた、と述べています。

悠久の調べ 二胡の演奏会

岡山県
支部

1月の井笠地区定例のつどいは、近くのグループホームの入所者も招待して二胡の演奏会でした。入所者から「唱歌や童謡をみんなで歌えて楽しかった」、演奏者から

「お年寄りの方と目が合ったらVサインが返り感激」、会員からは「入所者が私の母と重なり、胸が熱くなり『いつまでも元気にな』と声を掛けてしまいました」などの感想があり、人と人の心を結びつける素晴らしい演奏会でした。



国際交流委員会発 イギリスの巻 「ケアでつながる地球家族」

■ロンドン大会あれこれ

オリンピックを前に騒然としているロンドンは霧の街でした。「海外旅行をして世界の仲間と交流がしたい」という認知症の本人たちの願いが多くの方々の協力で実現でき、ありがとうございました。

いよいよ本人交流会。日本からの和傘や葛飾北斎の風呂敷などはとても喜ばれ、なごやかなムードを演出してくれました。驚いたのは、ご本人たちの流暢な英語での自己紹介。「きれいな英語ですね」と褒められMさんの顔が輝きました。

庄巻だったのはコンフェレンス・ディナーの後のダンスパーティーです。この日のために山本きみ子・雅英夫妻は練習を重ねてこられたのです。軽快なジャズ風の生バンドには、ちょっと合いませんでしたが、二人の優雅な踊りにまわりの方々も見惚れました。半袖をきて輪になって世界の仲間と手をつないで踊りました。

来年は台湾で開催されますが、富山と台湾の直行便もでき、また、みんなで行こう！ と就労作業で得た給料の積立てを始めた仲間もいます。



（国際交流委員 勝田登志子）



今月の本人 富山県支部 山本きみ子さん

「家族の会」本人支援専門委員会委員の山本きみ子さん（62歳）。ロンドンで開催された第27回ADI国際会議に出席し、イギリスの本人との交流が実現しました（本誌4月で既報参照）。

この会議に出席するまでには、本人の「海外旅行をして、世界の仲間と交流がしたい」の願いをかなえようと、本人や家族、支援者の勝田登志子副代表、富山県支部世話人、

「家族の会」の力が重なりあって実現しました。参加に至るまでには富山県支部で毎月開催している「本人のつどい てるてるぼうずの会」、「家族の会」と支部が共同で年2回開催している全国本人交流会で、一昨年より「2012年のイギリスの会議に行こう」と決意を固め着々と準備を進めてきました。

以下は山本さんの感想です。

みんな元気で堂々としていて元気をもらい、参加できてよかったです

初めてADI国際会議（3月7～10日開催）に参加しました。富山県支部からは11名、他支部から2名、国際交流委員他8名参加されて、みんなで21名。会場に着くまでドキドキ、ワクワクしながらロンドン市内から1時間余りで到着。会場はオリンピックIOC事務局になるところです。受付を済ませて日本ブース、富山ブースを皆で、「ここがいい、あちらがいい」とワイワイ言いながら飾り付けました。

8日前中から楽しみにしていたロンドンの若年認知症本人との意見交換会です。自己紹介から始まり、イギリスでのつどいの状況、就労、日々の過ごし方など質問したりされました。

みなさん明るく元気で堂々とされている姿を見て私も元気をもらいました。私も家にこもらずできる限り外に出てみんなの役に立ちたいです。みんな一緒につどいましょう。



富山ブースに来られた海外からの出席者



▲イギリスのご本人との交流会（左からリンダ・ホップさん、グラハム・ブラウンさん、きみ子さん、夫の雅英さん）

▲日本のブースの前で、イギリスのご本人、関係者らと談笑する山本きみ子さん（左から3番目）

9日夕方からはコンフェレンス・ディナーレセッション。イギリスらしい天井壁画の広い部屋、高い天井がとても素晴らしいディナーでした。また日本のブースが最優秀賞に選ばれ「やったー」とみんなで拍手して喜びました。

また夫と二人で楽しみにしていたダンスパーティもあり楽しく踊りました（P10に写真掲載）。おいしいワイン、ディナーをいただきダンスも楽しみました。参加できてよかったです。ありがとうございました。

来年は台湾で開催されるそうです。ぜひみなさんも参加してみてください。とても素晴らしい会議です。

富山県支部 山本きみ子

情報コーナー

交流の場

神奈川●6月23日(土) 午前11:00～午後3:00／若年期認知症よこすかのつどい→神奈川県立保健福祉大学
富山●6月9日(土) 午後1:00～3:30／てるてるぼうずの会→サンフォルテ2階介護実習室
滋賀●6月13日(水) 午前10:00～午後

2:00／ピアカウンセリング→滋賀県成人病センター職員会館2階
京都●6月17日(日) 午後1:30～3:30／若年のつどい→京都社会福祉会館
鳥取●6月24日(日) 午前11:00～午後3:00／若年のつどい「にっこりの会」→地域交流センター「笑い庵」「笑い庵カフェ&マルシェ」(米子市)
広島●6月9日(土) 午前11:00～午後3:00／若年期認知症・陽溜まりの会広

島→中区地域福祉センター（広島市）
6月23日(土) 午前11:00～午後3:00／若年期認知症・陽溜まりの会西部→あいプラザ（廿日市市）
6月23日(土) 午前11:00～午後3:30／木もれびの会→広島市社会福祉センター
宮崎●6月11日(月) 午前11:00～午後2:00／本人交流会「今日も語ろう会」→宮崎県支部事務所

詳細は各支部まで

高見代表の No.233

一筆閣上

りふ びつ けいじょう



一景送信))

愛知県新城（しんしろ）市内の豊川に架かる野田城大橋（4月21日、新城医師会、エーザイ㈱など共催の講演会で訪れる）



会員のみなさんお元気ですか。

京都府支部の会報4月号に、私のよく知る人が二人、登場しています。

一人は巻頭に、「もっと聞こう・もっと理解しよう認知症の人の思い!!」を寄稿している芦田豊実さん、63歳。61歳の妻を介護中です。

もう一人は、お便り欄に「(2月に) 青森の父が亡くなりました」と投稿しているS・Tさん。夫と姑の協力を得て母を介護中です。芦田さんの妻も、S・Tさんの母もどちらも今は要介護5です。

芦田さんは現役のサラリーマン時代に妻が認知症になり、退職して介護生活に入りました。S・Tさんは8年前に実母が認知症になりその後実父も脳梗塞を患ったため、両親を介護する姉を助けるために毎月京都から青森へ帰っていましたが、一昨年末、「冬の間だけ」といって実母を京都に連れてきて、そのまま介護しています。

この二人、共通することが多いのです。第一の共通点は、家族が認知症になった時、積極的に関わったことです。芦田さんは定年を待たずに退職しました。S・Tさんは、毎月、青森まで通いました。第二の共通点は、二人とも介護を始めてからヘルパー資格を取り、妻・母はデイサービスに預けながら、芦田さんは施設に勤めるようになり、S・Tさんはパートで働くようになったことです。そして極めつけの三つ目の共通点は、3月28日に発表があった今年の介護福祉士国家試験にそろって合格したことです。テレビなどで経済連携協定に基づき受け入れたインドネシアの人たちのことが報じられたあの試験です。外国人の合格率は37%と極めて低かったのですが、日本人の合格率も63%と決して高くはありませんでした。お二人さん、お見事！ と私は喝采しました。二人は連絡を取り合って、励ましあいながら進んでこられたわけではありません。それどころか、自分の判断でそれぞれの道を歩んでこられました。

家族の誰かが認知症になることは、それはつらくて悲しいことです。介護のために暮らしは一変し、それまでの人生の変更を余儀なくされることもあります。大変くやしいことです。それでも家族はそのくやしさを乗り越えて前進します。芦田さんが初めて「家族の会」に来たときから知っている私としては、「あの認知症に無知だった彼が専門職に！」と、驚きです。

二人の“快挙”に触れて、人は悲しみにうちひしがればかりはない、とあらためて思いました。

それでは、また来月まで、がんばってください。

2012.4

理事&本部事務局活動・業務日誌

●理事・本部活動●

5日★常任理事会／10日★朝日新聞取材高見⑩／19日★会報編集会議／電話相談月例会／25日★京都新聞取材 高見⑩／27日★オーストラリアADI協会来局 高見⑩、鷲巣⑩、小川・小野・三木⑩

●事務局業務●

13日★財團法人JK A 2012年度補助事業事務説明会 三木／19日～20日★東京関係団体・企業訪問 小川

文書等発受

4日 連絡 支部 「事務連絡」⑩／11日 通知 支部 「2012年度第33回総会の開催について」／連絡 支部 「事務連絡」⑩／13日 会報 支部 会員「ば～れば～れ381号 協力：京都府支部⑩／後援承諾 フォーラム認知症 in 福岡（NHKエデュケーション）⑩／18日 連絡 支部 「2012年度支部交流・研修会の実施要領について」「事務連絡」⑩／23日

後援承諾 第三回認知症グループホーム大会（日本認知症グループホーム協会）⑩／25日
連絡 支部 「事務連絡」⑩

- 会員数（個人・団体）10,599名・団体（4月15日現在）
- ホームページ総訪問者数のべ30,081件（3月1日～31日）
- 本誌発行部数26,000部

事務局

ほっと コーナー

毎年4月下旬には、支部の決算報告が繰りと本部に届きます。

計算書類だけでなく、残高証明などの証拠書類、パソコンで打ち込んだデータなど、全支部から次々に集まってきています。

それらが正しく処理されているか、間違いはないかチェックしていきます。その上で、46支部すべての決算と、本部の決算と合わせて法人決算とし、総会や内閣府に報告します。一つでも間違いがあればすべてに影響する、とても地道

な作業です。

これまで本部では、何度も会計担当者会議を開いたり、マニュアルを改善するなど、支部の皆さんにご協力いただきながら、公益社団法人にふさわしい決算事務の整備をすすめてきました。今はその集大成の時期といえます。

決算報告は、単なる数字の集まりではなく、その向こうには、支部の活動があり、会費を納めていただいた会員さん、協力いただいた方々など、たくさん的人が関わっています。そういった皆さんに、きっちりと正確な報告をするために、もうしばらく数字とにらめっここの日々が続きます。（4/25記）

（本部事務局 主任 小野貴志）